縄文土器編年研究と人骨発掘

矢野健一

一　山内清男の縄文土器編年の方法

縄文土器編年の基礎を築いた山内清男は、自らの土器編年の基礎を次のように簡潔に述べている。

「文化の進行は進行中の状態では観察できない。（中略）真に執るべき科学的手段は先ず、個々の短い時間の文物を確認する。そしてそれらを層位又はその他の自然現象に応じて年代順を定める。又はその欠を補うため文物の比較をして先後を推定する。そしてその短時期の文物を年代的に編成し、その間における文物の変遷を見るのが順序である。」

山内清男「縄文土器の細別と大別」『先史考古学』一―一、一九三七年

これは、土器型式の細別を進めるべきだとする山内の「細別主義」を表明した文章として名高い部分である。筆者が重要だと考えているのは、山内が「層位その他の」観点から年代順を定める以前に、「短い時間の文物」を抽出すべきだと断定している点である。遺跡から見つかった土器のまとまりが「短い時間の文物」であると認識するためには、他の遺跡から見つかった土器のまとまりと比較する必要がある。すなわち、バラエティに富む土器のまとまりと比べて、似通ったものばかりの土器のまとまりの方がより「短い時間の文物」であると判断されるはずである。また、A遺跡から見つかったバラエティに富む土器のまとまりが、a遺跡から見つかった似通った土器のまとまりとb

遺跡から見つかった似通った土器のまとまりを混合したものと型式学的にみて同じであれば、A遺跡の「時代」はa遺跡の「時代」とb遺跡の「時代」を合わせたものとみなすことができるかもしれない。ただし、a遺跡とb遺跡との時代の差を確かめるためには山内が述べるように「層位またはその他」の手段で年代順を確定していくことが必要である。

山内が「短い時間」を重視するのはまず、年代の「単位」を欲したからである。その単位を恣意的に抽出するわけにはいかない。したがって、「短い時間の文物」の抽出にとって重要なのは。ある限定された空間から、それだけが限定的に見つかるという事実である。ある遺跡で上下の層位関係を持って二つの「短い時間の文物」が発掘されれば何も問題はないが、そのような事例は多くはない。また、その場合でも、まず第一に限定された空間から「短い時間の文物を確認」することに注力すべきだと、山内は述べているのである。この方針に沿って、岩手県大洞貝塚A地点から得られた大洞A式、B地点から得られた大洞B式、千葉県加曾利貝塚B地点から得られた加曾利B式、E地点か

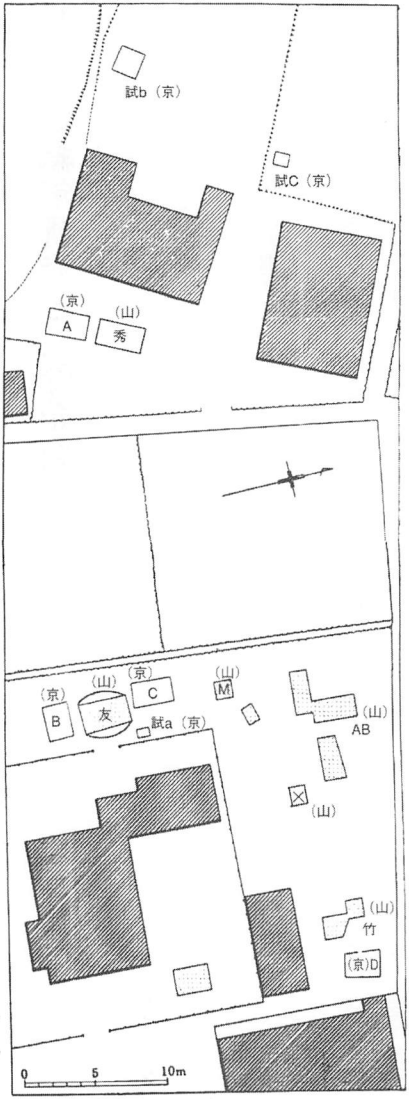

図1　岡山県黒土遺跡での山内清男設定発掘区（矢野ほか 2004）
＊（山）が1943年の山内発掘区、（京）は1944年の京大発掘区。

ら得られた加曾利E式などを自らの土器編年研究に組み込んでいく。

一九四三年に山内が発掘した岡山県笠岡市高島の黒土遺跡では、小発掘区を多数設定し、各発掘区から出土した土器の時間差を分析していた（図一、矢野ほか二〇〇四）。このように山内が地点差の抽出を目的として複数地点を発掘することについて、一九一七年における浜田耕作による大阪府藤井寺市の国府遺跡発掘調査の間接的影響を考え、口頭で発表したことがある（矢野二〇一八）。遺跡内の地点差を考慮した土器編年研究の重要性は現在もかわらず、土器の形態や文様の分析を行う型式学と一体となるべき「層位学」の一分野を形成するものと考える。この場合、「層位」を「水平層位」も含めて平面的に広く把握することになるので、広義の層位学と言うべきだろう。本論では、現在では当然とされる地点差の認識が明治から昭和初期の日本考古学の中でどのように形成されてきたかという点についての概略をたどり、地点差を予想した発掘区の設定にいたる経緯を考察する一助としたい。

二　垂直的層位重視の発掘

日本での遺跡発掘に複数地点に整然とした発掘区を設定したの

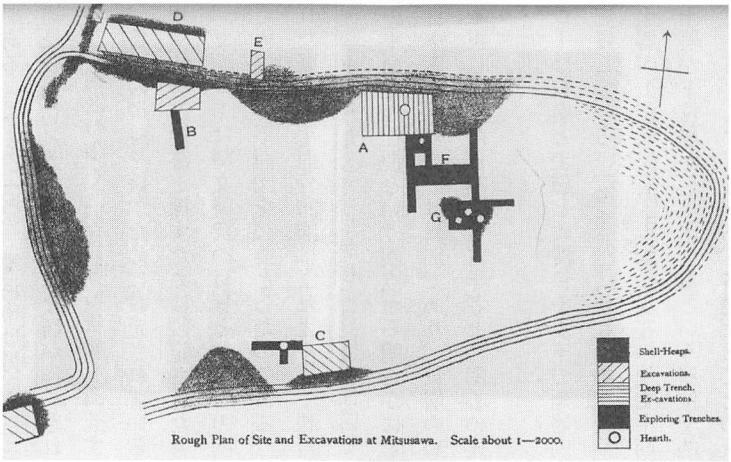

図2　1905年のマンローによる横浜市三ッ沢貝塚発掘平面図（Munro 1908）

はN.G.マンローが一九〇五年に横浜市の三ッ沢貝塚を発掘した時である（Munro 1908、横浜市歴博二〇一三）。この時、貝層の範囲と発掘された住居の炉跡、および方形の発掘区と細長いトレンチが図示された図が作成され、公表された（図二）。この遺跡には貝塚が九ヶ所に分散して存在しており、発掘区の多くは各貝塚の状態を調査するために設定されている。トレンチもその発掘区から地層の状態を見たり、住居の炉跡を探すために設定されている。F地点は貝塚が存在しない場所だが、台地周辺から中央への地層の広がりや住居の炉跡を探すために設定されたものである。住居の炉跡を表示するためにはトレンチを表示する必要がある。マンローは縄文時代の貝塚と住居との関係を説明するためにこの平面図を必要としたのである。住居跡とみられた竪穴の平面分布図はこれより早く報告されていた（佐藤重一八九〇）。しかし、貝塚と住居との関係を遺跡の平面的な把握という観点から明らかにした点は当時の日本考古学の中では異例であり、貝層の層位図の記載を重視していた日本人考古学者との関心の違いが際立つ。

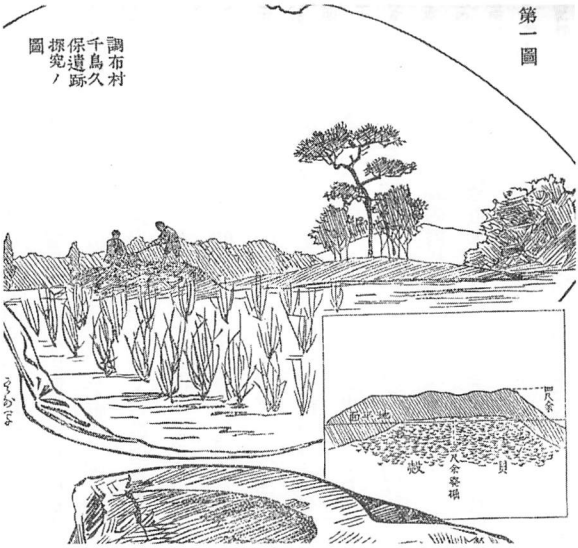

図3　1893年の東京都千鳥久保遺跡の遺跡図と層位図（内山1893）

マンローは貝層と土層との関係や上下の地層内の土器の差を記録している。「薄手式」（現在の縄文後期）に相当する土器が上位層、「厚手式」（現在の縄文中期）に相当する土器が下位層から出土するという層位学的所見も指摘している。しかしながら、各発掘区ごとの土器や石器の相違については言及しておらず、地点差については貝層や炉の分布などに関して指摘しているのみである。

出土遺物については層位ごとに記録したとされているが（横浜市歴博二〇一三）、地点差に配慮した分析を行ったという証拠は認められない。

それ以前にモースが一八七七年に行った東京都の大森貝塚（Morse 1879）や、モースの発掘に参加した佐々木忠次郎と飯島魁が一八七九年に実施した茨城県の陸平貝塚（Iijima and Sasaki 1882）の報告書は、遺物の紹介は詳細であるが、発掘区の記載や層位に関する記載はない。本論では、その後の明治期の発掘成果報告で人類学雑誌や考古学雑誌などに報告されている発掘報告から、当時の発掘の状況を見ていきたい。

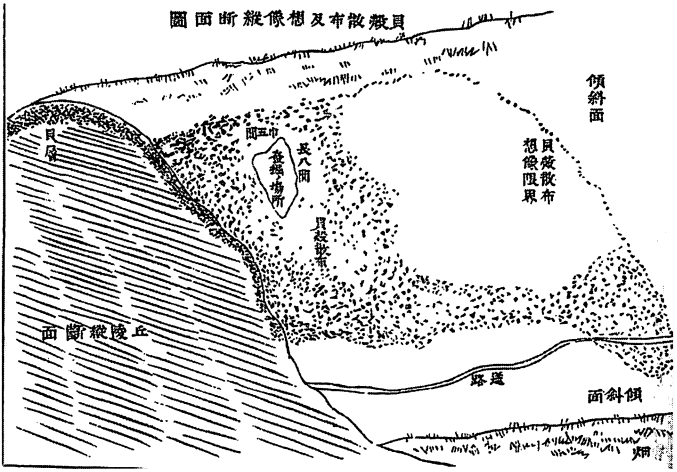

図4　1893年茨城県椎塚遺跡図（八木・下村1893）
＊中央やや左上に「発掘の場所」を図示。

古墳や横穴等を除き、開地遺跡の層位図（断面図）が図示されたのは一八九三年の東京都千鳥久保遺跡が初めてだろう（図三、内山一八九三）。この当時、石器時代の開地遺跡の多くは貝塚であり、この遺跡も貝塚である。地表面から約一・二mほど塚として盛り上がった状態の断面図が図示されていて、低い貝塚側面から掘り下げていき、貝塚中央部に向けて掘り進んだものと思われる。同年の茨城県椎塚貝塚の発掘報告では、八木奨三郎らは遺跡遠景の中に発掘範囲と層位図（断面図）を図示している（図四、八木・下村一八九三）。発掘範囲は不整形であり、当時は発掘区を方形に設定する発想はなかった。貝層が二層に分かれているが、詳細な土器の記述の中に土器の出土層

に関する記載は見られない。椎塚出土土器が距離的に近い陸平貝塚ではなく、遠い大森貝塚と土器の特徴が類似している点が注意され、この差が「厚手式（陸平式）」「薄手式（大森式）」の認識を形成する。

八木と下村は翌一八九四年の茨城県阿玉台貝塚の発掘では層位図や発掘地点の図を図示していない（八木・下村一八九四）。同年、佐藤伝蔵は茨城県福田貝塚と茨城県浮島貝塚（貝ヶ窪貝塚）を発掘しており、前者は層位図も図示されておらず（佐藤伝一八九四）、後者は層位図のみを図示している（佐藤・若林一八九四）。この頃の層位図のほとんどは貝層を説明するためのもので、出土土器の様相の差が層位差と対応することを説明するためには用いられていない。鳥居龍蔵は一八九三年、埼玉県新郷貝塚（当時「貝塚村貝塚」と呼称）の層位図を掲載して、貝層の上位層と下位層で貝の種類が異なることに注意しているが、土器の差には言及していない（鳥居一八九三）。

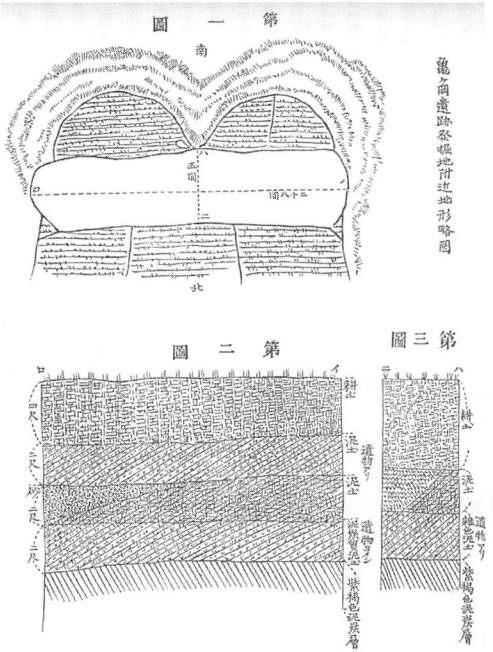

図5　1896年青森県亀ヶ岡遺跡の発掘区平面図と層位図（佐藤伝1896）

このように、明治期には貝塚の層位図が示されることがあっても、発掘区画の平面図が示されることはほとんどなかった。その中で、佐藤伝蔵は一八九六年の青森県亀ヶ岡遺跡の発掘で、約八m×四五mに及ぶ当時としては異例の長大で計画的な発掘区画を設定した平面図を示している（図五、佐藤伝一八九六）。この時、層位図を横断面と縦断面の二方向から図示したのも初めての試みである。しかも、この遺跡は貝塚ではなかった。佐藤が発掘した地点は緩傾斜地であり、遺跡が存在する台地を横断する形で全体の断面図を得たかったのだろう。佐藤は

上位層と下位層で土器の様相に違いがあるかどうかに注意しており、結果として上層と下層で差がみられないと述べている。しかしながら、長大な発掘区で平面的な分布に関しての土器の様相の差については注意していない。これ以外にマンローの発掘に至るまで、整然とした発掘区画が設定され、図示されている事例は存在しないので、佐藤の発掘方法が普及することはなかったとみてよい。佐藤の関心もあくまで垂直的層位にあり、層位図が得られれば、平面的な発掘区の拡張はこの頃には必要とはされなかった。

一方、同一遺跡内の地点に関する記載や図示は、一八九七年の岡山県沼貝塚発掘報告が初めてのものであろう（図六、山本一八九七）。ここで示された各地点（「イ」「ロ」など）は、貝層がかつて存在した範囲や当時の現地表面で確認できる複数の貝層の範囲を示している。各地点の貝層が発掘の対象となっているものの、地点ごとの土器の様相など遺物の違いは言及されていない。マンローが三ッ沢

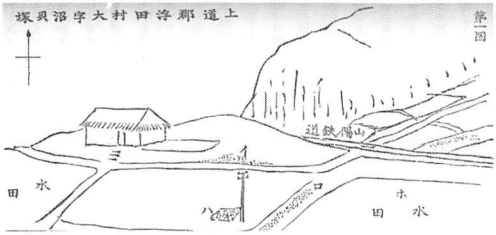

図6　1897年岡山県沼貝塚の地点表示図（山本1897）

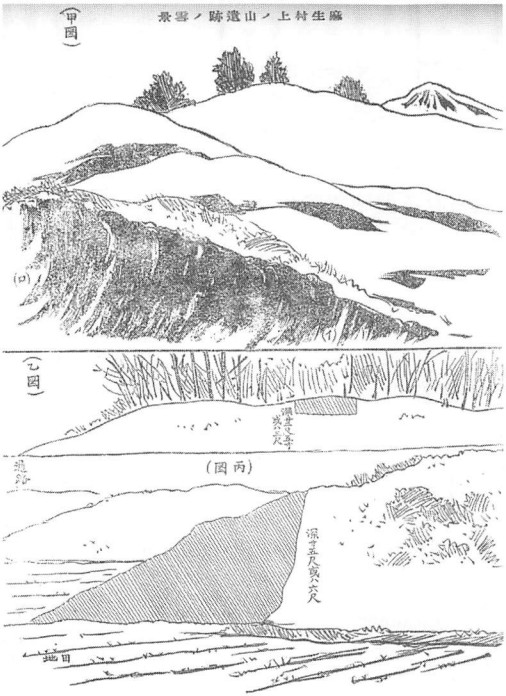

図7　1898年秋田県上ノ山遺跡の包含層発掘状況（大野1899）

貝塚において地点別に発掘区画を設定した理由も貝層が各地点に分散していたことが根本的な理由であり、マンローが地点ごとの土器の様相の差には特に関心を示していない点も含めて、沼貝塚も同様である。

明治期に発掘区が平面的に図示されない理由の一つとして、垂直に近い崖面や斜面に露出した貝層や遺物包含層を横方向に掘り進む場合が多かったこともあげられる。大野延太郎による一八九八年の秋田県上ノ山遺跡の発掘でも、

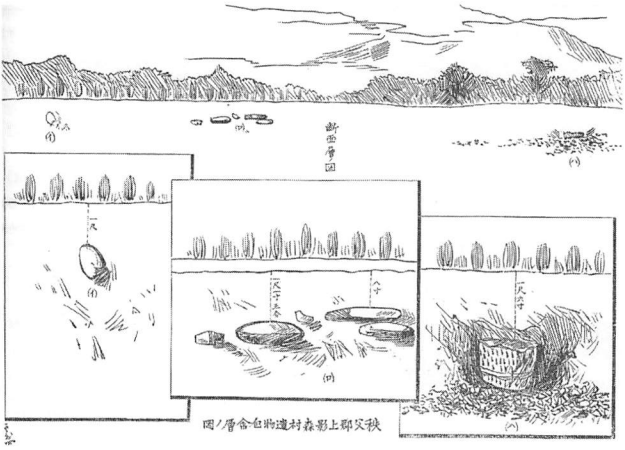

図8　1895年の切通しに見られる遺物包含状況図（阿部・大野ほか1895）

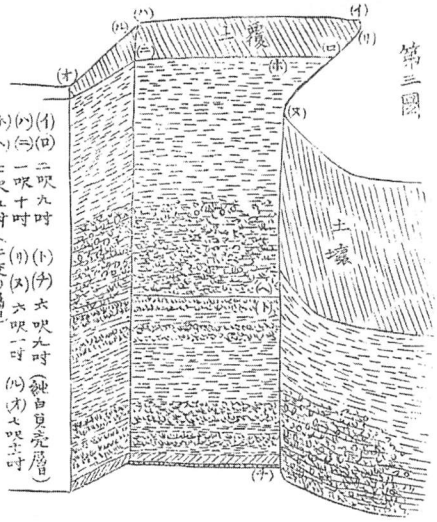

図9　1907年神奈川県南加瀬貝塚の層位図（八木1907）

平面的に発掘する地点以外に、露出した包含層を横に掘り進んでいる地点が図示されている（図七、大野一八九八）。大野は一八九九年の茨城県吹上貝塚でも同様に崖面に露出した貝層（遺物包含層）を発掘している（大野一八九九）。この頃には、道路工事などによって遺物包含層が露出することが多くあり、大野と鳥居は一八九五年の秩父旅行で道路工事による切通しの遺物包含状況を図示している（図八、阿部・大野ほか一八九五）。蒔田鎗次郎は東京都荒川区道灌山で弥生土器を含む多数の竪穴を一八九七年には常磐線（「海岸線」）工事で（蒔田一八九七）、一九〇二年には山手線（「豊島線」）工事で（蒔田一九〇二）生じた断層中に確認したことを報告している。八木奨三郎は一九〇七年に、弥生土器の貝層下部に石器時代土器（縄文土器）の貝層が存在することを神奈川県南加瀬貝塚の層位図を示して報告している（図九、八木一九〇七）。弥生土器の年代決定に重要な意義を有するこの遺跡の層位図は、弥生土器と縄文土器の貝層の上下関係を確認するために貝層を追って掘り進めたと推定できる形状を呈している。つまり、良好な層位図を得るために壁を追って発掘区を広げており、発掘区の平面形には関心を払っていなかった。

三　発掘区の拡大と分散

浜田耕作は大正期に西欧で学んだ考古学の調査法を京都帝国大

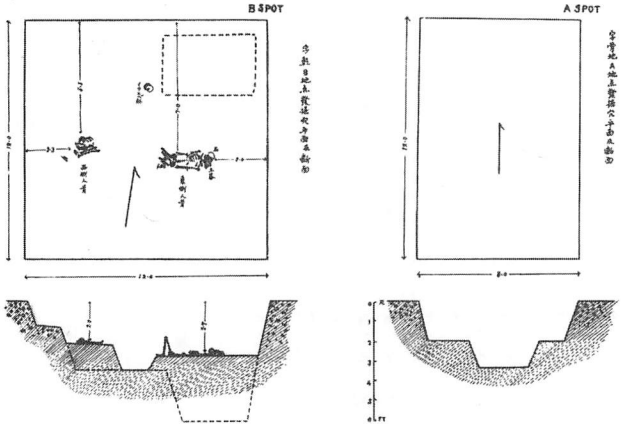

図10　1917年大阪府国府遺跡第1回発掘区平面図（浜田1918）

学において数々の遺跡発掘と報告書刊行によって実践した。ここでは、発掘区の拡大と分散という観点から浜田の発掘を検討したい。浜田は一九一七年に実施した大阪府藤井寺市国府遺跡の第一回発掘でA・Bの二地点を設定している（図一〇、浜田一九一八）。この発掘の目的はこの遺跡で発見されていた前期旧石器時代の疑いのある「大型粗石器」の出土層位を確認することであった。まず、遺物が多く出土するA地点を発掘して、この石器に類似する石器が

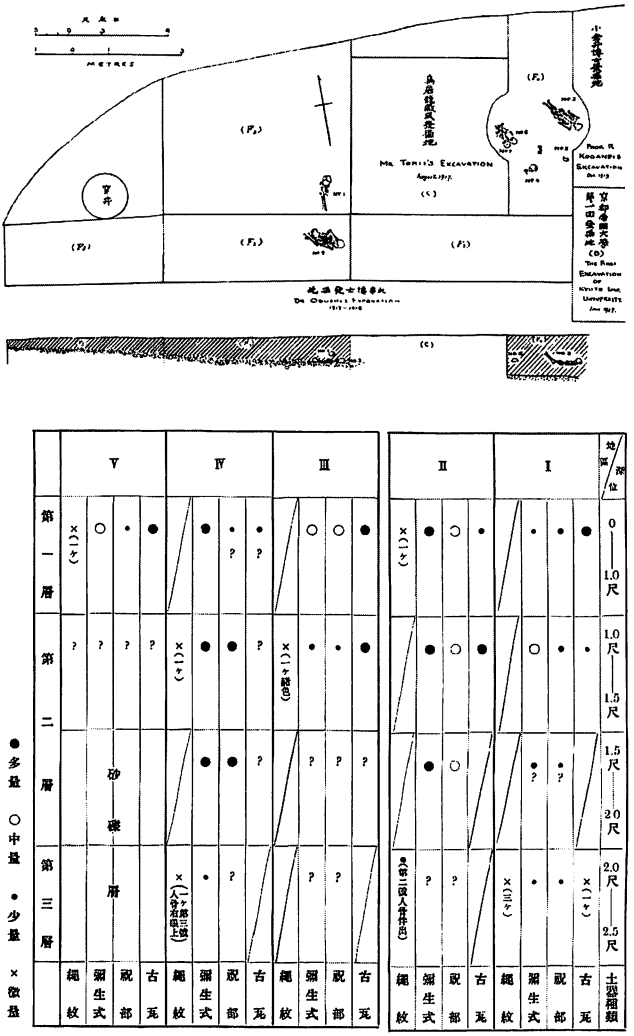

図11 1919年大阪府国府遺跡第2回発掘における発掘区平面図（上）と土器出土状況（下）（浜田・辰馬1920）

弥生土器等と混在することを確認した後、洪水の影響を受けないより高位にあるB地点を設定し、発掘した。浜田は貝塚ではないこの遺跡の地層を整然と区分することに苦慮しており、本格的な層位図を示していない。しかしながら、両地点の発掘区平面図は図示している。B地点では人骨出土状況が示されているが、A地点は奇妙なことに空白の方形区画のみが示されることになる。もし、B地点で人骨の出土がなかった場合、各発掘地点の位置がわかる図の提示で終わった可能性が高く、発掘区平面図は図示されなかっただろう。実際、人骨が出土しなかった一九二一年の鹿児島県出水貝塚報告では、発掘区の区割りと位置を示す図しか提示されていない（浜田・島田一九二一）。発掘区平面図は人骨出土状態図示のために必要だったのである。

浜田は国府遺跡第一回発掘のA・B両地点の遺物の相違についての詳細も述べており、土器を含む一部の遺物の出土地点に言及しているだけではなく、弥生土器や須恵器が両地点から出土するのに対して、縄文土器は人骨が出土したB地点のみから人骨を覆うように出土したことを強調している。この点が人骨の年代決定に決定的に重要であることを浜田は強く認識していたからである。A・B両地点の比較から、人骨出土の有無と縄文土器出土の有無との相関を導き出せた点が、発掘成果の学術的価値として極めて有意義であったわけである。

翌一九一九年の国府遺跡第二回の発掘では、人骨が出土したB地点に隣接した場所をF地点として広く発掘し、その中を五区画に分割している（図一一、浜田・辰馬一九二〇）。この発掘区の選定と拡大の目的が人骨の収集にあったことは明らかである。この時、この互いに接した五区画それぞれにおける各時代の土器の層位的出土状況を表に示した（図一一）。これは現在の発掘水準からみても異例といってよい非常に精密な層位学的分析である。浜田のこの分析の主眼は縄文土器と弥生土器との層位関係を把握することにあるだけではなく、人骨の年代決定を意図したためと考える。この遺跡は貝塚と異なり、層位を明確に区分するのが困難で、しかも当時は人骨埋葬の墓坑検出は考慮されていなかった。人骨の年代決定は近くで出土した土器から決めるしかなく、そのために発掘区の小区分も必要であり、小区分ごとの土器の層位的出土状況の把握が重要だった。掲載された人工層位に基づく層位ごとの土器出土状況

を示す表にも文章にも縄文土器と人骨との出土位置の関係が詳細に記載されている。その頃発掘されていた西日本の人骨の年代についての疑問を長谷部言人が論文中で述べており（長谷部一九一九）、浜田は国府遺跡発掘に訪れた長谷部本人とその点についても議論したはずである。

同年、京大が実施した岡山県津雲貝塚（島田・清野ほか一九二〇）や熊本県轟貝塚（浜田・榊原一九二〇）も人骨の発掘を意図したものであり、発掘面積は約四〇〇㎡以上（津雲）におよび、国府遺跡の数十㎡を大きく上回る。ここでも国府遺跡第二回発掘と同様の小区画が設けられている。これも人骨の年代決定の必要性を意識したものだろう。遺物については発掘区画ごとに土器の出土状況が記載されるが、結局、津雲では貝層中の人骨に伴う土器が縄文土器に限られること、轟では縄文土器以外が遺跡から出土しないことが強調され、区画ごとの各種土器の特徴が詳述されるわけではない。国府のような分析がなくても、人骨が縄文時代のものと確定できるからである。これらの遺跡発掘報告でも人骨発掘出土状況を図示した発掘区平面図が大きく掲載されている（図一二）。

人骨発掘を目的として発掘区が拡大していき、人骨出土状況を図示した平面図が掲載されるのは国府発掘以前の一九〇九年、千葉県余山貝塚発掘にさかのぼる（図一三、高

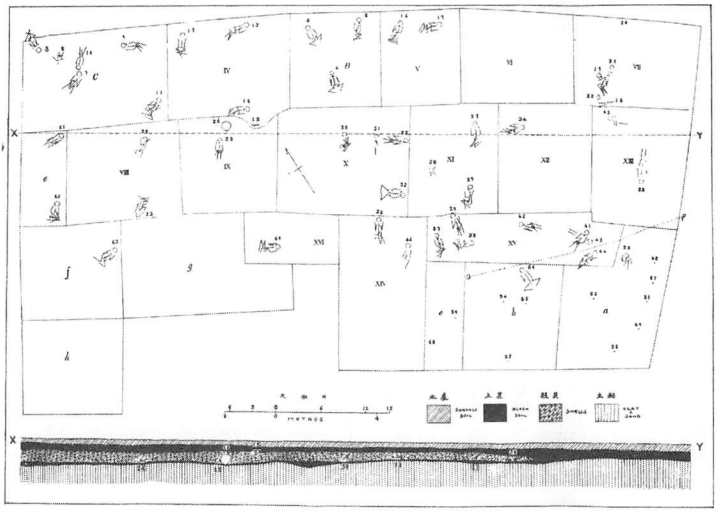

図12 1919年岡山県津雲貝塚発掘区平面図（島田・清野ほか1920）

島一九〇九)。余山貝塚は古くから知られていたが、一九〇六・一九〇七・一九〇八年の小発掘で一体ずつ人骨が見つかった後、一九〇九年の高島唯峰の発掘で新たに一三体の人骨が出土した。各年に継続した余山の発掘も人骨発掘が主目的であり、一九〇九年発掘の平面図には貝層の範囲と人骨出土地点が頭位とともに図示されている。このように出土例が増加する人骨に対する強い関心が継続し、浜田の国府遺跡以後の発掘区画を明示した人骨出土状況の平面図の図示にいたると考えてよい。

浜田と同じ頃、大山柏はドイツに留学し先史学を学ぶ。帰国後、大山史前学研究所を設立し、縄文遺跡の発掘を行い、史前学雑誌を刊行した。ともに、多くの後進を育てた点も浜田と共通する。ここでは、同様に、発掘区の拡大と分散が大山の発掘にも認められる点を確認したい。

大山柏は一九二〇年に沖縄県伊波貝塚を発掘し、約二〇〇㎡以上の発掘区の平面図を図示している(大山一九二二)。この発掘区は基本的には地形に沿って貝塚が存在する範囲の大部分を覆う形で設定されたものに、貝塚から下がる斜面に沿ったトレンチを含めたもので、浜田の設定した人工的な区画とは対照的である。佐藤伝蔵が一八九六年に設定した亀ヶ岡の発掘区に近いものと考えてよい。発掘区の区分もなされていない。この発掘が人骨発掘を期待したものかどうかはわからないが、この頃にはすでに述べ

図13 1909年千葉県余山貝塚発掘での人骨出土状況図(高島1909)
＊中央「高島」記名付近での人骨13体がこの時出土した。

たように、人骨発掘を目的とした広い発掘区を設定した貝塚発掘が行われていた。浜田耕作による一九二〇年の韓国金海貝塚（浜田・梅原一九二三）は人骨発掘を期待したかどうかはわからないが、約一三〇〇㎡以上の発掘区を設定している。

大山は、一九二二年、人骨収集を目的として愛知県保美貝塚を発掘し、約一五〇㎡以上の長方形に近い発掘区を人骨出土状況とともに図示している（大山一九二三）。発掘区の小区分は行っていない。人骨に伴う土器は縄文・弥生が混在することを強調している。同年、大山は千葉県加曽利貝塚を調査し、A・B・C・D各地点の位置を示した実測図も作成するが（図一四、大山一九三七）、この調査は初期の人骨研究を主導した小金井良精が加曽利貝塚出土の人骨発掘に備えて実施したものであった（滝口一九七六）。一九二四年に小金井良精はその実測図に記されたB・D地点と新たに設定したE地点を縄文土器編年研究を推進していた若手研究者である八幡一郎・山内清男・甲野勇・宮坂光次とともに発掘し、B・D地点から人骨三体分を得た（八幡一九二四）。この発掘調査において新たに設定された各発掘区の詳細な図示はなされていないが、B地点は二m四方のグリッドを二〇個作って発掘を行ったことが記されている。近年公開された小金井の野帳にはグリッド個数は二〇個ではないが、グリッドが図示されている（西田二〇一四）。野帳の

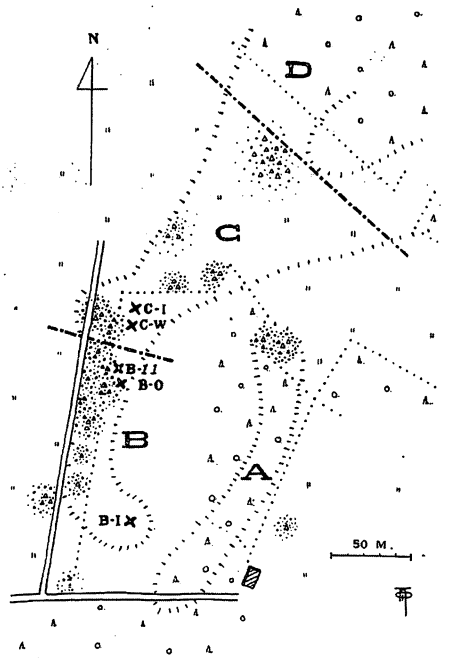

図14 1922年作成千葉県加曽利貝塚の測量図（大山1937）
＊×印の地点は後に加筆された1936年の発掘地点

図や写真によればD地点もE地点も同様の中規模の発掘区が設定されていた。このように、大規模貝塚の各地点での人骨調査を目的とした発掘のいわば副産物として、E地点出土の土器とB地点出土の土器の相違が認識され、縄文中期の加曽利E式、縄文後期の加曽利B式が設定されるにいたるのである。

四　発掘手法と土器編年研究

この加曽利貝塚の地点別発掘に先立つ一九二一年、榊原政職が神奈川県諸磯貝塚の発掘においてA・Bと名付けた二地点を発掘している（榊原一九二一a）。榊原は浜田の発掘に影響を受けており、同年、続けて神奈川県江戸坂貝塚にA～Cの三地点に小区画を設けて発掘し、各地点間の貝および土器の様相の違いに言及している（図一五、榊原一九二一b）。いずれも比較的狭い範囲に複数地点を設定する点、浜田の国府遺跡第一回の地点設定にも似ており、後の加曽利貝塚の地点設定とも共通する。この発掘は人骨収集を目的としたものではなく、貝塚の状況把握と土器への関心が優先していたと考えてよい。この頃には隣接した地点で土器に差がある可能性があることが認識されていたようである。

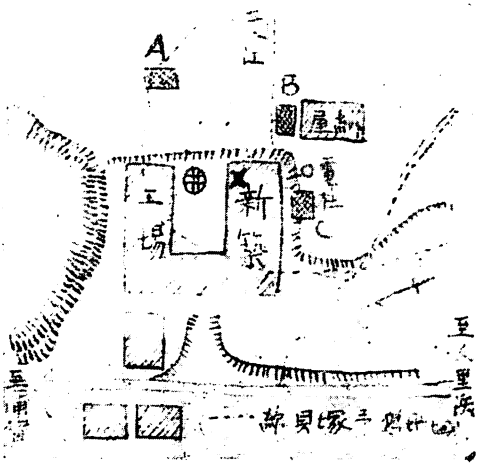

圖　像　想　塚　貝

図15　1921年神奈川県江戸坂貝塚発掘地点図
（榊原 1921b）

一九二四年の加曾利貝塚の発掘に参加した甲野勇は、同年、加曾利貝塚の発掘に先立って横浜市風早台貝塚（「生見尾村貝塚」）を調査し、総計約一五㎡になる隣接したA～Dの小規模の方形区画を設定した（図一六、甲野一九二四）。この設定の仕方は浜田が発掘区を小区画に分割した状況と似る。甲野は、この小区画間で、縄文土器の様相に差があることを認識している。小さな発掘区を分割して設置する状況は同年に八幡と山内が実施した福島県小川貝塚の調査でも実施されている（山内一九二四）。ここではまず二m四方の小区画を発掘し、その周囲に同規模の発掘区を設定して順次発掘している。翌一九二五年、長谷部言人が山内とともに調査した岩手県大洞貝塚で地点差が型式差に対応することが明らかになるが、それもこのような小区画を各地点で発掘した成果にもとづく（長谷部一九二五）。この発掘も基本的には長谷部の人骨発掘を目的としたものだった。

このように、大正期には人骨収集を主目的とした発掘では国府、津雲、保美のように発掘区画を拡張していく発掘方法と、加曾利貝塚や大洞貝塚などのように、大貝塚の各地点に小区画の発掘区を分散させて配置する発掘方法が併用されていた。拡張した発掘区内の土器の様相の差は国府遺跡などのように人骨の年代決定に関わって精査させることもあったが、土器編年研究に直接寄与したのは小区画を一遺跡の各地点に分散して配置する手法であった。この手法が土器様相の違いを識別することに役立つことが関東地方でいち早く縄文土器型式細別に応用されていく。

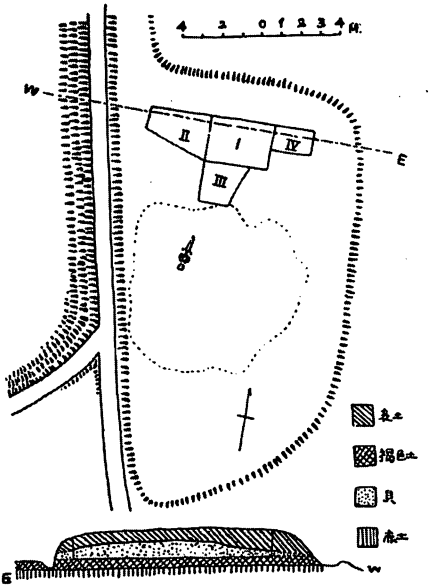

図16 1924年横浜市風早台貝塚発掘区画図（甲野1924）
＊図示された人骨はこの貝塚発掘の直接の契機となったもので、数年前に偶然発見されていた。

山内自身が影響を受けたことを強調している松本彦七郎の宮城県里浜貝塚などの層位的発掘はこれとは異なる（松本一九一九a・b）。松本彦七郎の発掘は里浜では崖面に露出している貝塚の遺物包含層を上面・側面から剥離したり、宝ヶ峯では一坪程度の区画を六層に分層しながら全体で一二〇cm程度掘り下げるような発掘方法であった。松本は明治期の垂直的層位重視の発掘をより精密な形で実践したのである。その結果、各層から得られる土器片数は少なく、松本の土器分析が器形、文様、厚みなどの個々の属性の変化を追うことに主眼が置かれ、土器型式としての実態、すなわち各属性が統合した土器の実態の把握が客観的に困難であるのは発掘方法にも起因する。山内は松本の影響を強調するが、土器型式を細かく分類して変化を追うという山内編年の重要な原則である「細別」と系統的理解自体は松本に負うところが大きいものの、細別型式の有意義な実態把握という点では遺跡間、地点間の比較に基づく短期間の土器型式の把握が必要だった。

地点差を縄文土器の細別型式の編年に活かす研究は関東・東北で先行したが、一九三四年に発掘された京都市北白川小倉町遺跡の報告では、小林行雄が北方発掘区の小区画ごとの土器分類点数集計グラフを作成し、層位学的所見と合わせて細別土器型式（北白川下層式・特殊凸帯文土器・北白川上層式に相当）の編年を提案している（図一七、梅原一九三五）。このような分析が可能になる基礎は、短期間の遺物のまとまりの確認である。小林の編

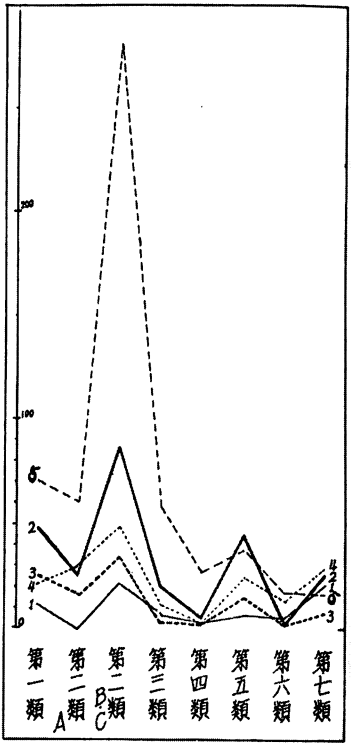

図17 小林行雄による1934年発掘の京都市北白川小倉町遺跡の発掘小区別土器点数グラフ（梅原1935）

＊グラフ左右の1～5が発掘小区を示す。第五類が特殊凸帯文土器に相当する。

年も特殊凸帯文土器を出土する大歳山遺跡がすでに発掘されていたことで、土器型式の把握が進み、この遺跡の土器編年整理が順調に進んだと推測する。

引用文献

阿部政功・大野延太郎・鳥居龍蔵一八九五「秩父地方に於ける人類学的旅行」『東京人類学雑誌』一一〇、二九三―三一七頁

内山九三郎一八九三「武蔵国荏原郡調布村字峯千鳥久保遺跡発掘」『東京人類学会雑誌』八六、三〇八―三一二頁

梅原末治一九三五「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』一六

大野延太郎一八九八「羽後国北秋田郡七座村大字麻生上ノ山遺跡取調報告（第一回）」『東京人類学会雑誌』一四三、一七九―一八二頁

大野延太郎一八九九「常陸吹上貝塚調査報告」『東京人類学会雑誌』一五六、二〇七―二一一頁

大山柏一九二一「越前国松島村通珂崎遺物包含層発掘概報」『人類学雑誌』三六―四・五・六・七、六七―八〇頁

大山柏一九二二『琉球伊波貝塚発掘報告』（一九八二年第一書房復刻版）

大山柏一九二三「愛知県渥美郡福江町保美平城貝塚発掘概報」『人類学雑誌』三八―一、一―二五頁

大山柏一九三七「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」『史前学雑誌』九―一（加曽利貝塚号）、一―六八頁

甲野勇一九二四「武蔵国橘樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』九―四・五・六、一八四―一九九頁

榊原政職一九二一a「相模国諸磯石器時代遺蹟調査報告」『考古学雑誌』一一―八、四四三―四六五頁

榊原政職一九二一b「久比里貝塚に就て（一）」『考古学雑誌』一一―一〇、五八四―五九一頁

佐藤重紀一八九〇「陸奥国上北郡の竪穴」『東京人類学会雑誌』五一、二五六―二六三頁
佐藤伝蔵一八九四「常陸国福田村貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』一〇〇、三八四―四二〇頁
佐藤伝蔵一八九六「陸奥亀ヶ岡第二回発掘報告」『東京人類学会雑誌』一二四、三八九―四六七頁
佐藤伝蔵・若林勝邦一八九四「常陸国浮島村貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』一〇五、一〇六―一一五頁
島田貞彦・清野謙次・梅原末治一九二〇「備中国浅口村津雲貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第五冊
高島唯峰一九〇九「貝塚叢話」『考古界』八―五、二二七―二三〇頁
滝口宏一九七六「加曽利南貝塚の調査」『加曽利南貝塚』中央公論美術出版
鳥居龍蔵一八九三「武蔵北足立郡貝塚村貝塚内部ノ状態」『東京人類学雑誌』九二、七二―七三頁
西田泰民二〇一四「一九二四年の加曽利貝塚調査」Anthoropological Science (Japanese Series), Vol.122(2), pp.167-175
長谷部言人一九一九「宮戸島里浜貝塚の土器に就て」『現代之科学』七―三、三二九―三三八頁
長谷部言人一九二五「陸前大洞貝塚（発掘）調査所見」『人類学雑誌』四〇―一〇、三四九―三六〇頁
浜田耕作一九一八「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第二冊
浜田耕作一九二一「薩摩国揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第六冊
浜田耕作・梅原末治一九二三「金海貝塚発掘調査報告」『大正九年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府
浜田耕作・榊原政職一九二〇「肥後国宇土郡轟村荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第五冊
浜田耕作・辰馬悦蔵一九二〇「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第四冊
浜田耕作・島田貞彦一九二一「薩摩国出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第六冊
蒔田鎗次郎一八九七「弥生式土器」『東京人類学会雑誌』一三八、四八一―四八五頁
蒔田鎗次郎一九〇二「弥生式土器と共に貝を発見せし事に就て」『東京人類学会雑誌』一九二、二三三―二三九頁

松本彦七郎一九一九a「陸前国宝ヶ峯貝塚の分層的小発掘成績」『人類学雑誌』三四―五、一六一―一六六頁
松本彦七郎一九一九b「宮戸島里浜介塚の分層的発掘成績」『人類学雑誌』三四―九、二八七―三一五頁
八木奨三郎一九〇七「中間土器（弥生式土器）の貝塚調査報告」『東京人類学会雑誌』二五〇、一三四―一四二頁
八木奨三郎・下村三四吉一八九三「常陸国椎塚介墟発掘報告」『東京人類学会雑誌』八七、三三六―三八九頁
八木奨三郎・下村三四吉一八九四「下総国香取郡阿玉台貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』九七、二五四―二八五頁
八幡一郎一九二四「千葉県加曾利貝塚の発掘」『人類学雑誌』九―四・五・六、二〇九―二一二頁
矢野健一二〇一八「大阪の縄文土器と縄文研究の現状」『シンポジウム河内地域の縄文時代遺跡と縄文土器資料集』大阪歴史博物館
矢野健一・村上昇・加藤雅士・近藤奈央二〇〇四「岡山県高島黒土遺跡資料」『岡山県高島黒土遺跡資料　茨城県前浦遺跡資料　動物埴輪資料』山内清男考古資料一四（奈良文化財研究所史料第六六冊）
山内清男一九二四「磐城国新地村小川貝塚発掘略記（小川貝塚―三貫地貝塚―竪穴群）」『人類学雑誌』九―四・五・六、二一二―二一六頁
山本頼輔一八九七「岡山県下に於ける貝塚発見報告」『東京人類学会雑誌』一三〇、一三四―一四一頁
横浜市歴史博物館編二〇一三『N・G・マンローと日本考古学―横浜を掘った英国人学者』横浜市歴史博物館
Iijima, I and Sasaki, C 1882 "Okadaira Shell Mound at Hitachi"（一九八三年第一書房復刻版）
Morse, S.E 1897 "Shell mounds of Omori" Memoirs of the Science Department, Tôkiô Daigaku（University of Tôkiô）
Munro, Neil Gordon 1908 "Prehistoric Japan"（一九一一年の再版に基づく一九八二年第一書房復刻版）

（立命館大学文学部教授）